

公共圏と「多元的近代」の社会学理論

Sociological Theories of the Public Sphere and “Multiple Modernities”

田中 紀行（京都大学大学院文学研究科 准教授）

【国内参加者】

吉田 純（京都大学大学院人間・環境学研究科 教授）
油井 清光（神戸大学大学院人文学研究科 教授）
三上 剛史（神戸大学大学院国際文化学研究科 教授）
中村 健吾（大阪市立大学大学院経済学研究科 教授）
朝田 佳尚（日本学術振興会 特別研究員 / 京都大学大学院文学研究科）
濱西 栄司（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会 特別研究員）
鈴木 良典（京都大学大学院文学研究科 修士課程）
園 知子（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）
高橋 顕也（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）
田村 周一（神戸大学大学院人文学研究科 教育研究補佐員）
田 恩伊（神戸大学大学院国際文化学研究科 博士前期課程）
ライカイ・ジョンボル（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）

【海外参加者】

Jeffrey Alexander（Yale University, Sociology Department 教授）
Bryan S. Turner（National University of Singapore, Asian Research Institute 教授）
林 端（国立台湾大学社会学系 教授）

【ねらいと目的】

この国際共同研究は、拠点プログラム全体のテーマにとって最も基礎的な理論的枠組にかかわるものである。現代のアジアにおける親密圏・公共圏の構造的分化過程は近代西欧におけるそれとどこまで共通し、どのように異なっているのか、さらにはアジアにおけるモダニティは西欧のそれとどれほど異なるのか、そもそもモダニティは普遍的なものなのかといった問題について考えるため、S.N.アイゼンシュタットの提唱する「多元的近代」(multiple modernities) 論を手がかりに理論的・学説史的検討を試みたい。そのため、社会学史・社会学理論を専攻する内外の研究者に集ってもらい、このテーマに関連する代表的な社会学理論（ヴェーバー、パーソンズ、ルーマン、ハーバーマス、ネオ機能主義、ネオ・ヴェーベリアンなど）を総合的に検討することを考えている。社会の構造化や親密性・公共性の観念の歴史的・文化的多様性に関する理論のほか、ヴェーバーからアイゼンシュタットに至る比較歴史社会学の成果がアジアにおける社会変動とグローバル化を捉える上でもつ意義や、さらにはアジア（特に東アジア）の歴史的経験をふまえた研究が社会変動論・モダニティ論に対してなしうる理論的貢献についても検討したい。

【活動の記録】

◇第1回研究会 2008年12月6日

- (1) 田村周一 《文献紹介》 S. N. Eisenstadt, *Essays on Multiple Modernities* (邦訳予定の自選論文集)
- (2) 田中紀行 《文献紹介》 Thomas Schwinn (Hrsg.), *Die Vielfalt und Einheit der Moderne. Kultur- und strukturvergleichende Analysen* (VS Verlag, 2006)

◇第2回研究 2009年2月14日

林端 「グローバル化時代の儒教倫理 — 社会学的考察」

◇第3回研究会 2009年3月14日

- (1) 中村健吾 「トランスナショナルな公共圏はいかにして可能であるか — N. フレイザーとJ. ハバーマスの(すれ違いに終わった?) 論争」
- (2) 濱西栄司 《文献紹介》 S. N. Eisenstadt, “The Civilizational Dimension in Sociological Analysis,” *Thesis Eleven* 62

◇第4回研究会 2009年7月18日

- (1) 油井清光 「グローバル化の下での『複数の近代』 — 共同体・中間集団・市民社会」
- (2) 田恩伊 《文献紹介》 *Communities Directory: A Comprehensive Guide to Intentional Communities and Cooperative Living* (The Fellowship for Intentional Community, 2005)

◇第5回研究会 2009年9月26日

- (1) 三上剛史 「〈個人と社会〉再考 — 『と』の理論と現在」
- (2) 高橋顕也 《文献紹介》 Niklas Luhmann, “Differenzierung” (*Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, 1997, Kap. 4)

◇第6回研究会 2009年10月31日

- (1) 吉田純 「再帰的近代化論と親密圏・公共圏論の布置」
- (2) ライカイ・ジョンボル
「社会主義近代化に伴う『空虚な個人化』問題 — ハンガリーを事例として」

◇第7回研究会 2009年12月19日

- (1) 首藤明和 (兵庫県立大学准教授)
「日本と中国の親密圏と共同性の比較研究 — 〈家・同族〉と〈房・宗族〉の視点から」
- (2) 朝田佳尚 「多元的近代とポストモダン」

◇第8回研究会 2010年3月20日

- (1) 園知子 「再帰的近代化と公共圏・親密圏」
- (2) 田中紀行 「国際共同研究のまとめと今後の課題」

【成果の概要】

2008年12月以降、ほぼ2カ月に1回研究会を開催し、主として国内メンバーによる研究報告と文献紹介を行った。当初計画していた Bryan S. Turner (ウェルズレイ・カレッジ) を囲むワークショップならびに Jeffrey Alexander (イェール大学) を招いての国際シンポジウムが予算削減等の事情により開催できなかったため、実質的な国際共同研究としては、残念ながら林端 (国立台湾大学) との交流が実現できたことにとどまった。研究成果は成果報告書のほか、三上剛史著『社会の思考—リスクと監視と個人化』(学文社、2010)、油井清光「グローバル化の下の『複数の第2の近代』」『社会学評論』第60巻第3号、2009)などの形で公開されている。

成果報告書に寄稿された論文のほとんどは研究会での報告をもとにしたものであり、①モダニティの社会学理論、②公共圏の社会学理論、③個人と社会の関係といったテーマに関わるより抽象度の高い社会学理論にそれぞれ関する論考、④それらのいずれかを具体的な事例に応用した経験的研究に大別できる。このうち林端の論文では、ヴェーバーやパーソンズらによって「個別主義的」と評価されてきた儒教倫理が普遍主義的要素を含むものであり、グローバル化時代という新たな文脈のもとで積極的意義をもつ可能性がベック、ルーマンらの社会学理論に言及しつつ示唆されている。このほか、再帰的近代化論と親密圏・公共圏論の相互関係の解明(吉田純)、グローバル化論と多元的近代論の接合および日本の近代化の事例への適用(油井清光)、個人と社会という対概念の相互関係の再構成(三上剛史)といった独自の理論構築も試みられた。さらに、ポスト社会主義期ハンガリーにおける市民社会形成(ライカイ・ジョンボル)や戦前期京都の知識人ネットワーク(園知子)に関して理論研究をベースにした事例研究も行われた。



写真1



写真2

1. S. N. アイゼンシュタット

(http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Shmuel_N._Eisenstadt.jpg)

2. ユルゲン・ハーバーマス

(http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/23/JuergenHabermas_retouched.jpg)

